2023 年度　玉川学園高等部入学試験問題

国　語

（注意事項）

(1)　試験時間は 50 分間、配点は 100 点満点です。

(2)　問題用紙は冊子 1 部、解答用紙は 1 枚です。

(3)　解答用紙の受験番号欄には受験番号のみを記入して下さい。

(4)　解答は、すべて別紙の解答用紙の所定欄に記入して下さい。

(5)　解答用紙の＊欄には、何も記入してはいけません。

(6)　試験開始の合図があるまでは、問題用紙を開かないで下さい。

(7)　印刷が不明瞭な場合をのぞいては、質問を受け付けません。

【二】 次の問いに答えなさい。

問一、次のカタカナを漢字に直しなさい。

1　恩師とソエンになる。　2　石をミガく。　3　私語をツツシむ。　4　戦意をソウシツする。　5　業界のジュウチンだ。

問二、次の――線部の漢字の読みを、ひらがなで答えなさい。

1　恩恵を受ける。　2　お札を刷る。　3　過去を悔やむ。　4　詳細な報告を求める。　5　基礎疾患がある。

問三、次の文章について、それぞれの問いに答えなさい。

私は昨日、新しいスマートフォンを買いにショップへ行ったが、[a]どこを探しても欲しい機種は見つからなかった。私は、近くにいた店長に商品のある場所を[b]聞いてみた。店長は近くにいた店員に呼びかけ、電話をさ[c]せたが、入荷日はまだ[d]わからないそ[e]うだ。

1　――線部aの文節の数を漢数字で答えなさい。

2　――線部b「聞い」の活用形を答えなさい。

3　――線部c「せ」・e「そうだ」の助動詞の意味を、次の選択肢の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア　伝聞　　イ　例示　　ウ　希望　　エ　打ち消し　　オ　使役　　カ　断定

4　――線部d「まだ」の品詞名を答えなさい。

【二】 次の文章は浦久俊彦氏による『リベラルアーツ――「遊び」を極めて賢者になる』からの抜粋文である。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。設問の都合上、表記を改変している部分がある。

人生を遊びつづけるために必要なことは、まずは、自分の「遊び場」をつくること。そのためには、自分と世界との関係をつかんでおくことです。たとえば子どもたちは、遊ぶことによって自分と世界との関係をつかんでいきます。子どもにとって「遊び」は、世界に出合うためのものであり、想像と創造の翼を羽ばたかせることを育むための広場でもあります。

では、大人たちにとってはどうか？

たとえば、「自分が日本人であることに気づく」。これは、[1]自分と世界との関係をつかむ視点を身につけるために、とても大切な「気づき」になってくれます。自分が日本人であることは、日本人ならば誰でも知っています。でも、日本のなかにいると、なぜか自分が日本人であることになかなか気がつきません。まわりも日本人ばかりで、日本人であることを意識する必要がないからです。

たとえば、外国に出ると、日本人であることがつねに自分に付いてきます。外国人との会話は「あなたは何人ですか？」からはじまるように。そうして日本人である自分を、外国人と相対的に眺めるようになる。そうすることではじめて**「日本人になる」**のです。これは、自分と世界との関係をつかむうえで、とても重要な出発点になります。

〈中略〉

ほんとうの旅人になって、一生涯さまざまな土地を巡りながら生きていく。このような人生は、たとえ憧れたとしてもなかなかできることではありません。

A 、誰にでもできることがあります。それは、[X]**自分の人生を旅するように生きてみる**ことです。

まちがっても、人生設計などというものを描こうとしないこと。「三〇年後に自分はこうなっている」とありもしない未来を想定していまの自分ができる可能性を限定してしまうことになるなら、それはいかにももったいないことです。

この本を手にしてくれた新世代の君たちに、ぜひやってほしいことがあります。**少なくとも二〇代のときに、ふたつ以上の国の異なる文化にふれておく**ことです。それを経験しているかどうかで、これからの人生が大きく変わる。そういってもいいくらいです。

一九歳でフランスに渡ったとき、ぼくには学歴も[2]肩書きも何もないと思っていましたが、まず思い知ったのは、日本という国で生きていたぼくにとっては、日本人であるということがいかに大きな「肩書き」だったかということでした。

日本人であるということだけで、日本の国は日本人を守ってくれます。これは、とてつもなく大きな「肩書き」だったことに気づいたのです。日本人

が日本にいれば、少なくとも言葉が通じないといって国外に追い払われることはない。有色人種だといって露骨にゴミに触るような態度で扱われることもない。街をただ歩いているだけで、不審者扱いされて警官に逮捕されるようなこともない（すべてぼくの身に現実に起きたことです）。

これらはすべて「日本人という肩書きを持って日本に生きている」だけで得られる特典です。**外国で生きるということは、日本人である自分を外側からみるということでもある。それは、君たちの人生にとってかけがえのないもうひとつの視点を与えてくれます。**

そのために、いますぐにでも日本を離れてどこかほかの国で暮らしてみる。ほんとうは三年くらい離れてみると、日本という国と自分自身がはっきりみえてくるはずですが、それが難しければ、一年でも、半年でも構いません。そのようなことを、人生が落ち着いて生活が固まるまえにとにかくやってみる。それができるのは、若さの特権でもあるわけですから。

ともかくたんなる観光ではなく、自分と異なる文化のなかに身を置いて生活してみるという体験が、これからの長い人生の出発点で、どれほど自分という軸をつくるのに役立つことか。この貴重さは、どれほど強調しても強調しすぎることはありません。

目的など、何もなくても構わない。むしろない方がいいかもしれない。ただ日本を離れてみる。それだけで十分です。[B] 自転車をひとつ持ってアメリカ大陸を縦断してみるとか、そこまではできなくても、自分なりの工夫をしてみれば、たとえお金がなくても、きっとやり方はいろいろあるはずです。

なぜ、生まれた国を一度離れてみる必要があるのか？

それは**自分が生きた国を外から眺めることで、自分の「地図」を描くことができるから**です。その世界のなかにいると、自分がどのような場所にいるのかはよくみえません。ところが、たとえば飛行機に乗って空からみてみると、自分がいた場所がどういうかたちをしているのか、どのような起伏があって、海岸線がどういうかたちをしていたのかがみえてきます。外からみると、地図が描けるというのは、そういう意味です。

ぼく自身の体験を少しお話しさせてください。ぼくが西欧の文化や芸術に憧れてヨーロッパに渡ったとき、日本のことなど興味もなかったし、何ひとつ知りませんでした。まだ若かったせいもあり、はじめは夢にまでみたパリの街を歩き、枯れゆく街路樹や街並みの美しさに心を奪われる日々を、ただ夢中で過ごしていたものです。

ところがあるとき、ふとパリの地下鉄の駅構内に貼られた巨大なポスターに日本の桜の風景が描かれているのをみた瞬間、どっと涙があふれてきました。何という美しさ！　まるで自分が探していた「何か」に出合ったような感動。そのとき、ぼくは自分が日本人であったことにはじめて気づかされたのです。

あたりまえだと思われるかもしれません。でも、**この「あたりまえ」は、日本人として日本に生まれ、日本に暮らすだけの「ふつうの日本人」であるぼくたちには、じつはなかなかわかりにくいこと**なのです。もし、海外で暮らしていなければ、[3]ぼくが日本の桜の切ないまでの美しさに気づくことは一生涯なかったかもしれない。いまでもそう思っています。

新世代の君たちが、これからの人生を歩いていくために自分の「地図」を描いておく。これはとても大切なことです。[4]誤解してほしくないのは、**それは人**

生を組み立てる「設計図」ではないということ。あくまで**世界を描くため、そして世界を遊ぶための地図であって、そこにゴールや目的が記されているわけではありません。**

ひとつだけ注意しておきたいのは、たとえ君が海外で暮らしはじめたとしても、現地の同胞である日本人を頼るようなことは、できるだけしない方がいいということです。できるだけ現地の人々のなかで、現地の言語をしゃべってみる。ジェスチャーでもなんでもいいので、とにかくコミュニケーションを成立させることをやってみる。

ぼくがイタリアを旅していたときに、世界中を旅しているという日本人の青年に出会ったことがあります。彼は、三つだけその国の言葉を覚えれば、それだけでどこでも旅できると豪語していました。いま思えば、おかしな変わった人でしたが、笑えるくらいに現地の言葉が喋(しゃべ)れずに、それでも、もう一年以上も世界中を旅していたということなので、おそらくはほんとうだったのでしょう。

人生を旅することは、ひとつの場所に縛られないということでもあります。これは住む場所を変えつづけるという意味ではありません。生きていると、知らず知らずのうちに、ぼくたちが固定観念と呼ぶ「常識」のようなものに固まってしまいがちです。それに染まらないために、自分のなかに5「遊民」のような気持ちを抱きつづけることです。

人生を旅することは、必ずしも世界各地を旅して歩くことだけではない。いつでもどこでも、どのようになっても、身体ひとつでどこにでもいける自分になっておくこと。

人生は予知できないことの連続です。どんなに綿密な設計図を描いても、そのとおりにはなりません。大切なことは、予想外のとんでもないことが起きても、それを受け入れられる自分であるようにしておく、つまり**人生をフラットにしておく**という意味でもあります。

もうひとつ、人生の旅人になるための、**人生をかけて挑むべきもうひとつの旅**があります。それは、**本の世界を旅すること**です。

本とひとくちにいっても、その世界はあまりにも広大で、その旅で何が起きるのか、あらかじめ準備することも、予想することもできません。それは、まさに冒険そのもの。すなわち、本の世界を旅することは、人生の冒険者になるということにもつながるのです。

6偶然、手にとった一冊の本が人生を変えたなどということは、本の世界ではよく起こることです。たまたま開いたページに悩んでいた自分の進むべき道を指し示す言葉が書いてあったりと、本の世界は、偶然や神秘的な出来事の連続であふれています。

いま、若い人たちが本を読まなくなったといわれますが、ぼくが思うに、それは本という［1］な世界の底知れぬ魔力（ぼくにとっては魅力ではなく魔力そのもの）にまだ気づいていないだけです。本の世界は迷宮としかいいようのない神秘の世界です。最近の大ヒット作*『鬼滅の刃(やいば)』では、大正時代を舞台にした神秘的な世界観に若者があれだけ夢中になれるのですから、本の摩訶(まか)不思議な世界にもきっと魅せられるはずです。

たとえば、本の背表紙。あれは、たんなる「本の背」ではありません。日々、自宅の本棚の何千という背表紙を眺めて暮らしていると、本の背表紙は

まるで「[2]」のようにもみえてきます。ぼくたちが普段の生活で接しているのは、あたりまえですが生きている人たちだけです。でも、本の世界は違います。生者と死者が入り混じっている世界。というよりも、いい本の著者は圧倒的に故人であることが多い。つまりは死者です。ふと手にした古典の著者が一〇〇〇年もまえの人だったということも、本の世界ではごくふつうに起こります。

でも、現実に死者と対話できるのは、*霊媒者にでもならないかぎりは不可能です。本の世界だけが、いま、ここにいない先人たちの声を聞くことができる。考えてみればすごいことです。

生きている人々との交流という現実社会は、いわば「横のつながり」でできています。けれども、文化とは「縦のつながり」をつくりだすことにほかなりません。過去の偉大な魂と対話できる本は、過去と現在をつなぐ「縦のつながり」の世界です。それは、過去の偉大な遺産を未来に伝える橋をかけるということでもあるのです。

それに、本は、ただ手にとって読むためだけにあるのではありません。本に出合う、本にふれる、本に恋する、本と別れる、本の森に迷う、背表紙の海を泳ぐ、などなど、人類のあらゆる創造力と想像力と叡智の象徴でもある本というあまりに壮大な世界を遊ぶことは、ある意味では、現実の世界を冒険すること以上に大きなものを君たちの人生にもたらしてくれるかもしれません。

本の世界を旅することのはかりしれない魅力のひとつに、7時空を超えた旅ができるということがあります。たとえば、東京から名古屋まで旅をするとします。いまなら新幹線で一時間四〇分ほどの距離ですが、これが江戸時代には一〇日ほどかけて旅をしていたわけです。たった二時間足らずと一〇日間。けれども、一〇日間という時間をかけなければみえない景色や、抱けない感情がきっとあったはずです。そこにあるのは時間の違いだけではありません。令和と江戸。その途方もない隔たりと、旅の日々のなかで彼らが経験したことも感じたことも、まるで別物です。そこに流れる時間の速度もまったく違う。旅という概念だけ（で）なく、人生そのものすら、現代と江戸時代ではまったく違う意味を持っていたのはまちがいないからです。

それを体感するために、たとえば*十返舎一九の*『東海道中膝栗毛』を読むのです。冒頭の「武蔵野の尾花がすゑにかゝる白雲と詠しは、むかし〳〵浦の苫屋、鳴たつ澤の夕暮に愛て、仲の町の夕景色をしらざる時のことなりし」という、たった一文を味わってみるだけでも、一気に江戸時代にタイムスリップしたような、わくわくした旅の予感を感じさせてくれます。これこそが、まさに本の世界を旅する醍醐味のひとつなのです。

◎〈たとえば、*ベートーヴェンに憧れてウィーンに旅をするとします。美しい街並みは、たしかに*楽聖をしのばせてはくれますが、残念ながら彼が生きた時代のウィーンを歩くことはもはやできません。けれども、当時の人々の文章とともに過去のウィーンを旅することはできます。歴史の扉を開いてくれる本が、あなたを過去に連れて行ってくれるからです。〉

本は、自分のまだ知らない世界への扉でもあります。その世界を旅することで、ぼくたちは、散歩するベートーヴェンの姿や、カフェでくつろぐベートーヴェンの姿を思い描くことができるようになります。Y その小さな冒険の数々が、君たちの人生をどれほど豊かにしてくれることか。それは、はかりしれないほど大切な何かをもたらしてくれるはずです。

（注）＊『鬼滅の刃』……吾峠呼世晴（ごとうげこよはる）によるマンガ作品（二〇一六から二〇二〇年まで連載）。
＊霊媒者……死者の霊に代わって、その死者の意思を伝える人。
＊十返舎一九……江戸時代後期の作家、絵師（一七六五年生―一八三一年没）。
＊『東海道中膝栗毛』……十返舎一九の作。二人の男が徒歩で東海道をめぐる旅を描いた。
＊ベートーヴェン……ドイツの作曲家、ピアニスト（一七七〇年頃生―一八二七年没）。
＊楽聖……非常に優れた音楽家のこと。

問一、――線部1「自分と世界との関係をつかむ視点」とあるが、この視点を持つために必要なことはどのようにすることか。「～こと」につながるように、文中から二十一文字で抜き出して、最初と最後の三文字を答えなさい。

問二、[A]・[B]に入れるのに最もふさわしい言葉をそれぞれ次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア　なぜなら　　イ　たとえば　　ウ　では　　エ　すなわち　　オ　けれども

問三、――線部2「肩書き」の意味を説明したものとして最もふさわしいものを次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア　世間からの高い評価
イ　性格の特徴から付けた呼称
ウ　由緒や伝統のある血筋
エ　社会的な地位や身分
オ　優れた能力や行為

問四、――線部3「ぼくが日本の桜の切ないまでの美しさに気づくことは一生涯なかったかもしれない」とあるが、日本人の筆者が「日本の桜の切ないまでの美しさ」に気づいたのはなぜか。この理由を説明したものとして最もふさわしいものを次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア　日本ののどかな田園風景の中で見る日本の桜とパリの華やかな都会の中で見る日本の桜とでは、後者の桜の方が周囲の風景にはなじまない異様な存在として目立ち、海外生活に慣れた筆者の関心を強く引いたから。

イ　海外渡航の当初は日本に対する興味が全くなかった筆者だったが、様々な国で観光をする中でパリの街中で美しく際立つ日本の桜を見出したとき、日本の文化や芸術を蔑んでいた自分に情けなさを覚えたから。

ウ　筆者にとっては日本よりも西欧の文化の方が心惹かれるものだったが、異郷のパリで生活を送ったことで日本や自分を客観的に見られるようになり、故郷の花はかけがえのない大切なものだったと悟ったから。

エ　筆者は外国での生活の中で外国人だからという理由で不審者扱いされるなどの酷い仕打ちや不当な扱いを受けたことで、かつては憧れていたパリでの生活に嫌気がさし、自分の故郷の桜が切実に恋しくなったから。

オ　筆者は長い間ヨーロッパで生活し続けたことで、最初は目新しくて憧れていた西欧の文化や芸術に慣れてしまい、自分の故郷の芸術や自然の素朴な美しさが西欧のものよりも優れていることを改めて実感したから。

問五、――線部4「誤解」とあるが、この「誤解」とはどのようなことか。三十文字以上三十五文字以内で説明しなさい。

問六、――線部5「遊民」とあるが、ここでの「遊」という漢字の意味を、次の漢字辞典を模した図の【字義】から抜き出して答えなさい。

12(9)
遊
13(9)【遊】ユウ（漢）ユ（呉）
【字義】〈動詞〉あそ－ぶ。㋐たわむれる。楽しむ。㋑各地を気ままに観光する。㋒故郷を離れて仕官を求める。㋓落ち着く場所を持たずぶらぶらする。㋔慣れ親しんだ友人とつきあう。㋕あちこちをめぐって演説する。

問七、――線部６「偶然」の対義語を漢字で答えなさい。

問八、[1]に入れるのに最もふさわしい四字熟語を次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

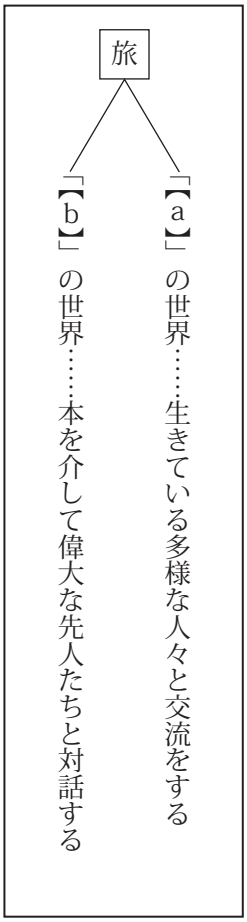
ア　奇想天外　　イ　我田引水　　ウ　温故知新　　エ　一石二鳥　　オ　油断大敵

問九、[2]に入れるのに最もふさわしい言葉を次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア　羅針盤　　イ　墓碑　　ウ　海水浴場　　エ　宝物　　オ　遊園地

問十、――線部７「時空を超えた旅」とあるが、具体的にどのようなことか。◎段落の内容を用いて説明しなさい。

問十一、═══線部Ｘ「自分の人生を旅するように生きてみること」とあるが、ここで筆者の考える「旅」についてまとめた次の図の空欄【ａ】・【ｂ】に当てはまる語句をそれぞれ六文字で抜き出して答えなさい。



問十二、═══線部Ｙ「その小さな冒険の数々が、君たちの人生をどれほど豊かにしてくれることか」とあるが、「これまで本の世界を冒険したことで人生が豊かになったあなたの経験」について八十文字以上百六十文字以内で述べなさい。

【三】 次の文章は、『蛤の草紙』のあらすじと、本文の抜粋（㈠～㈢）である。これを読んで、後の問いに答えなさい。設問の都合上、原典（『御伽草子』岩波日本古典文学大系）の表記を改変している部分がある。

昔、天竺の摩訶陀国（現在のインドにあった国名）にしじらという四十歳の男がいた。しじらは貧しく、六十歳を過ぎた母親と二人で暮らしていたが、飢饉（飢え苦しむこと）の中でなんとか母親を養おうと海に出て魚を釣りに行った。そこで蛤を釣り上げたところ、そこから金色の光が差し、中から十七、八歳くらいの美しい女房（女性のこと）が現れた。どうしても家に連れ帰ってほしいという女房を、しじらは仕方なく母親の待つ家へ連れ帰ることにした。しじらが女房を家に連れて帰ると、母親は女房をたいそう歓迎した。

㈠

女房仰けるやうは、「われはこれ来りし方も知ず、もとよりゆくゑも知らぬ身なれば、いかやうにもしじらと置かせ給へ。われ人知らぬ営みをもして、諸共にうき世をわたり候はん」とのたまひければ、母*なのめに喜び給ひて、さらばといひて、しじらに此由いひければ、もとより親孝行の人なれば、ともかくも母の御はからひと御返事申されければ、天竺も人の*心の甚だしき所なれば、みなみな人申しけるは、「しじらの所にこそ、①不思議のふり人わたり候。いざや参り拝まん」とて、*道俗男女にいたるまで、*くましねを包みなどして参りけり。さるほどに*白米三石六斗日のうちに寄りたり。

しじらは母親を養えると喜び、女房は糸を手に入れ、機織りを行った。母親はそれを不思議に思っていたが、彼女を大事にするようになった。それを見たしじらもうれしく思い、飢饉であるにもかかわらず平穏に暮らしていた。ある夜、しじらは母親を労わるため、母親の足を自分の額の上に置いて寝ていたところ、突然しじらが泣き始めた。

(二)

其時しじらがそばに寝させ給ひたる女房、しじらに尋ね給ふやうは、「何とて泣き給ひ候ぞ」b と仰ければ、「若き時御太り候ころは、御足を額に寝させ申すに重くおはしまし候ひしが、はや御年もより給へば、次第に身も細らせ給ひて、ことの外に軽く候程に、泣くよりほかの事はなく候」と語り給へば、女房聞き給ひてのたまふやう、「誠にうらやましのしじらの心や。いかなる仏の御恵みもなどかあらざらん。か程に親孝行の人は、世にめづらしき事や」とて、やがて物語をぞし給ひける。

その後、女が織物を作り上げると、しじらに三千貫で売りに行くよう言った。あまりに高値だったため、誰も買う者はおらず、しじらが諦めて帰ろうとしたそのとき、ある老人がその織物を買い取り、しじらを自分の屋敷へ誘う。老人に言われるまま、しじらが屋敷に向かうと、そこは豪華な装飾が施された立派な屋敷であった。しじらはふるまわれた酒を七杯飲み、織物の代金を受け取って家に帰る。

(三)

女房に*かくと語らんとしければ、其時の有様をいはぬさきに、少しも違はず女房語り給へば、しじら心に思ふやう、②恐ろしの事や、是は神通をさとる化身ii ぞやと思ふ所に、此女房仰けるは、「さらばわれわれは御いとま申し候はん」とのたまへば、母聞きて「*うたてしき御ことかな。此程は思ひのほかなる人を迎へ参らせて、しゞら共にうれしく思ひ参らせ、何にたとへん方も候はぬに、かやうに仰せ候事、*あら情なや」とて、天に仰ぎ地にふして、歎き給ふ事は限りなし。

女はしじらたちに自分は観音に仕える童女であると正体を明かし、天に帰っていった。しじらたちはどうすることもできなかったが、それから家は富み栄え、しじらは母を養っていくことができた。さらには仏のような尊い存在となり、七千年生きることになった。

これらのことは親孝行の証である。この物語を読み、親孝行をすれば、このように富み栄えて現世と前世の願いはすぐに叶う。ひとえに親孝行をして、この物語を他の人にも読み聞かせるべきである。

（注）＊なのめに…たいそう。
＊道俗男女…僧や一般人、男や女などあらゆる人。
＊白米三石六斗日のうちに…たくさんの米が一日のうちに。
＊うたてしき…がっかりする。
＊心の甚だしき所なれば…好奇心が強いので。
＊くましね…神仏に捧げる精米。
＊かくと語らんとしければ…織物を売った経緯を話そうとしたところ。
＊あら情なや…なんて嘆かわしいのでしょう。

問一、――線部A「はからひ」を現代仮名遣いに直して、すべてひらがなで書きなさい。

問二、――線部ⅰⅱの本文中の意味として最もふさわしいものをそれぞれの選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ⅰ「うき世」　ア　世の中　イ　世代　ウ　時代　エ　共同体

ⅱ「いとま申し」　ア　お誘いを申し上げ　イ　お断りを申し上げ　ウ　お祈りを申し上げ　エ　お別れを申し上げ

問三、――線部ａｂの現代語訳（口語訳）として最もふさわしいものをそれぞれの選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ａ「いかやうにもしじらと置かせ給へ」

ア　どんなときも、しじらをこの家に置いてやってください
イ　どういう様子で、しじらと母親はここで暮らしているのだろう
ウ　どのようなことがあったか分かりませんが、しじらが悪いのだろうか
エ　どのようにしてでも、しじらと一緒に住まわせてください

ｂ「何とて泣き給ひ候ぞ」

ア　どうして泣いていらっしゃるのですか
イ　何と言って泣けばいいのだろう
ウ　何が何でも泣けばいい、というものではない
エ　泣いても何にもなりませんよ

問四、――線部①「不思議のふり人」とは誰を指すか。選択肢の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア　しじら　　イ　しじらの母親　　ウ　女房　　エ　作者

問五、――線部②「恐ろしの事や、是は神通をさとる化身ぞや」とあるが、しじらが女房に対してこのように思ったのはなぜか。選択肢の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア　織物を見知らぬ老人が買い取ってくれた上、屋敷でもてなされたという女房が知らないはずの出来事を、全て正確に話すことができたから。

イ　織物を三千貫で売ろうとしたしじらが誰にも相手にされず、みじめな目に遭ったことを女房が知っていて、慰めてくれたから。

ウ　見知らぬ老人が三千貫という高値でも買い取ってくれるような優れた織物を、女房がいとも簡単に織り上げたから。

エ　女房がしじらの家を富み栄えさせ、しじら自身にも七千年の寿命を与えるという不思議な現象が起きたから。

問六、次の会話文は、「蛤の草紙」の主題について教員と生徒が交わしたやりとりである。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

【会話文】

教員　この物語を読んで、何か気になったところや分からなかったところはあったかな？

生徒A　最後に筆者が親孝行の大切さを説いているのに、主人公のしじらが本文㈡でお母さんの足を自分の額の上に置いて寝ているときに泣く場面がありました。そもそもどうしてお母さんの足を額の上に置くのかが理解できませんでした。

教員　これは、お母さんへの最上級の敬意を表すエピソードだと考えられるんだ。仏教の中には「仏足頂礼（ぶっそくちょうらい）」といって、仏の足を頭の上に乗せるようなポーズで仏への敬意を表す作法がある。

生徒B　ああ、しじらは仏と同じくらいにお母さんのことをとても大切に思っているということか。「［W］」と言ってるから、この行為はずいぶん昔から続けていることが分かるよね。

生徒A　確かにそうだね。しじらって、本当に親孝行だったんだね。X それは物語の最初のほうの本文㈠からも読み取れるよね。

教員　うん。ところで、蛤の中から現れた女房も親孝行したと言えるだろうか？

生徒B　はい、言えると思います。なぜなら、女房はしじらのお母さんを養うために機織りをしたし、お母さんも女房と別れるとき、すごく悲しんでいるからです。

生徒A　私は、女房の行動が親孝行になっているとは言えないと思う。［Y］。

教員　そうだね。この女房はしじらとは違う描かれ方をしていて、そもそも人間ではなかったということが本文にも書いてある。本文㈢の後で、女が自分は観音に仕える童女だと正体を明かしているんだ。

生徒B　ああ、だから本文㈢で天から来た人として天に帰っていくわけか。Z

教員　他の誰よりも親孝行をすれば天や仏からも認められる、そういうことを伝えるためにこの物語は作られたのだろう。

生徒A　昔から、親孝行はとても大切だと考えられていたんですね。

(1) W に当てはまる語句として最もふさわしいものを選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア　昔は額に置いていたお母さんの足を、今では膝の上に置くよう心掛けている

イ　昔は重く感じたお母さんの足が、年老いた今となってはとても軽く感じる

ウ　昔はお母さんの足を額に置くのが泣くほど苦痛だったが、今はそうでもない

エ　昔はお母さんの足は軽かったが、年を重ねると共に重くなったような気がする

(2) ――線部X「それは物語の最初のほうの本文㈠からも読み取れるよね」とあるが、本文㈠から読み取れるしじらの行為を説明しなさい。

(3) Y に当てはまる言葉として、どのようなものが考えられるか。選択肢の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア　女房が機織りをしたのは、しじらと母親があまりに不憫だったからじゃないかな。しじらがあまりに貧しい暮らしをしていたから、女房だけでなく天竺の人々も皆で彼らに同情しているんだよ。

イ　女房が機織りをしたのは、しじらを心から愛するようになったからじゃないかな。最愛の人のために何かをしてあげたいという気持ちが彼女に機織りという行為をさせたんだよ。

ウ　女房が機織りをしたのは、しじらを裕福にするためだったんじゃないかな。あくまでも女房がしじらのところに来た理由は、彼の親孝行ぶりを評価することだったしね。

エ　女房が機織りをしたのは、しじらへの恩返しのためだったんじゃないかな。しじらが蛤を釣り上げてくれたからこそ女房の命は助かったわけで、機織りは彼女のしじらへの感謝の気持ちの表れだよ。

(4) ――線部Z「天から来た人として天に帰っていく」とあるが、このように「天から来た人が天に帰っていく」要素が入った作品はどれか。選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア『平家物語』　イ『土佐日記』　ウ『おくのほそ道』　エ『竹取物語』